

ふるさと
歳時記

◆潮谷寺公開講座

九月二十四日、県立歴史博物館の櫻井成昭氏を講師に「浦の佛堂・村の寺」という演題で講演会が開かれた。

毛利高政の触書から「耕作の強制と浦の保護」という施策の特徴を述べ、浦々に現存する古仏から、古くからあった寺を城下寺院の末庵とすること



潮谷寺前立阿弥陀如来像

◆彦嶽神社本殿の改築

で人心掌握をはかったのではないかと。百万遍念仏などの村の信仰が今も残っていると、佐伯地方の特性を話された。

台風の被害を受けた彦嶽神社本殿の改築作業が十月二日行われた。拝殿は既に解体され再建の予定はないそうだ。本殿は明治十一年三月に造られた御影石製の石殿を覆うもので、石殿に納められた御神体は緑泥片岩で次のように刻まれている。

【表】

彦嶽山十二神社
奉鎮座 伊弉諾尊 守護

伊弉册尊

彦火々出見尊

【裏】寛文元年辛丑年（一六六一）年

正月二十八日

緒方姓入内先祖

狩生村庄屋



改修前の彦嶽神社本殿

野々下治郎兵衛

野々下治郎兵衛は寛永年間、狩生村庄屋に任じられ弟利三郎・城奥の二人を伴って狩生村に入った。水田開発が進み後に大庄屋並となった。初代治郎兵衛の墓は会員野々下静氏の墓地にある。寛文十三年四月十日（一六七三）
飯空一清了拘禪定門

◆養賢寺寺宝展

十月八〜十一日、三余館で毛利家菩提寺養賢寺の寺宝展が開催された。当寺は修行道場のため一般の拝観を謝絶しているが、創建四〇〇年を記念して一般公開されたものである。

初代藩主毛利高政候尊像を中心に寺宝の数々が展示されていた。八代高標



初代藩主毛利高政像

の書額・十一代高泰の書幅、その他歴代任職の書画や広瀬淡窓・明石秋室など郷土文人の書幅など見ることができた。入場者には小冊子「養賢寺の沿革」が配布された。



8代毛利高泰の書



明石秋室と広瀬淡窓の書

◆三重町宝光寺を訪ねて

応永廿一年（一四一四）讃岐守大神惟世が佐伯庄宝光寺の鎮守満天宮に寄進した鰐口が、豊薩合戦の際に持ち去られたのか延岡市浦城天満社の所蔵となり、今は延岡市の文化財である。

佐伯庄宝光寺の所在は不明だが、會員川野晃斎君から三重町に同名の寺が現存していると聞いて案内してもらった。当寺は臨済宗妙心寺派で由緒によると寛永十一年（一六三四）に創建され、寛文八年（一六六八）白杵月桂寺五世古峰を開山として中興された、とある。

境内墓地には寛永年間以前の墓は見あたらず、本堂裏手に天神石祠が祭られていること、裏庭手水鉢に正平年号の水輪（五輪塔）が使われているのに驚いた。中興以前の寺地は別の場所に



三重町宝光寺の山門

あつたと住職の案内で訪れたが、今は田んぼの一隅に石柱が一基立っているだけだった。

この辺の寺院は豊薩合戦で焼失したものが多く、佐伯庄宝光寺の所在は謎のままだが、三重町の宝光寺には因尾山部方面にも檀家が多いという。

◆中島子玉の七言絶句

広瀬淡窓に秀才と讃えられ後に藩校四教堂の教授となった子玉の掛軸が、清川村の所蔵者から四教堂塾を通じて佐伯へ里帰りした。

箱書きは「中島子玉七言絶句」とあり大正元年晩秋、万寿寺（大分市）の住職足利紫山が無爲室において書いたとある。

（訓読）
五更酒を過れて君が家を出ず
酔眼朦朧として歸路除かなり
茗を呼ぶも山妻眠りて起きず



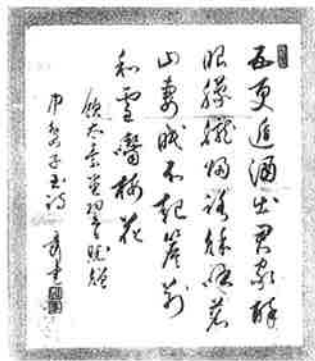
中島子玉の書

簷前の雪に和して梅花を嚼む
太素堂と飲んで翌日賦して贈る

如玉（子玉の別字）

この詩文を写した中根貞彦の色紙が存在し、太素堂は桜小路にあった中根家（貞彦の養父は旧佐伯藩士・第百九銀行初代頭取、中根祚胤）のことかと思われる。その掛軸が大正元年に万寿寺紫山の手に残り、戦後再び佐伯の好事家牧方氏が所蔵し、美術商の手を経て清川村の好事家の手に渡ったという、流転の逸品であった。

（解説協力者 木許博・香川隆喜）



中根貞彦の色紙



広瀬淡窓の二行書

◆広瀬淡窓没後一五〇年

昨十月から十一月にかけて日田市内で記念事業が開かれていた。

天領日田資料館では広瀬淡窓の一五〇年展を、日田豆田文化交流館では長三洲の遺墨展を見学。市役所ロビーでは「咸宜園の四季」と題した創作和紙人形展を、淡窓が恩師松下筑陰を頼って佐伯へ逗留した場面が印象に残った。咸宜園では秀才中島子玉の話しを聞き、淡窓図書館の「古今書家名品展」では宜園十八才子の一人秋月橋門の遺墨に

も出会うことができた。

佐伯市在住の知人宅に淡窓の掛軸があるというので見に行つて驚いた。日

田資料館の「一五〇年展」に展示されパレットにも紹介されている

《6「詠史」四首ノ内 七言絶句」二行書》

と筆跡も落款も全く同じものだった。

中国の歴史を詠んだ詩で

男女三千席狼を避け

塵を受け^{あつま}同り住む聖人の郷

平原^{あつま}廣澤は皆吾が土

誰が許す徐生が王と^{なり}作て来るを

咸宜園に問い合わせて右の通り解釈し

だが、読みが正しいかどうか…。

◆盃^{さかずき}台の箱書き

弥生提内五十川某氏宅に伝わる漆器を納めた箱で、由来が記されている。

【表】 嘉永二酉年

盃臺 朱三つ組受 黒盃臺

三月 切畑村組之内

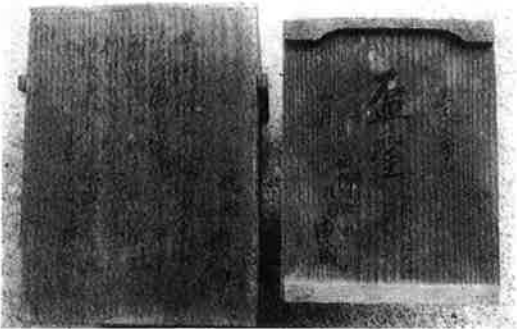
提内 由蔵

【裏（口語訳）】

下川様が^{ごるすい}大坂御留守居、御勤番のた

め、弘化三年年（一八四六）御登坂遊

ばされ、其節、御供を仰せ付けられ罷^{まか}



盃台の箱書き（提内由蔵）

り登る。嘉永二酉年（一八四九）三月、
 御暇相願おいしまい罷まかり下り、心齋橋筋藤屋五
 兵衛の店にて盃臺共にこれを求む。

【註】 下川様とは佐伯御家中、当時の
 席帳によれば、御給人格・下川長右衛
 門、御中小姓、下川繁右衛門、下川左
 太夫、下川左仲太の名が見える。

◆戯曲「佐伯葛港」の発行

會員麻生英臣氏が「少年期の記録に
 基づく」終戦前後の葛港を舞台にした
 戯曲を平成九年に著作、昨年十二月一
 部修正して発行された。

登場人物

●第一幕 葛港貸席街の辻広場

（昭和二十年四月）

おつや（色白肉感的精薄女十七歳・

海軍兵士の間では〇〇〇〇とから

かわれていた。）

霊長泉のおやじ（地元漁師、兵士、貸

席女相手の風呂屋主人）

女蒸気機関士（十八歳）

デモサ（東京市立第一中学校放校生）

富川節子（東京白百合学園女子学生）

おかね（貸席 金水桜の女主人）

絹ちゃん（金水桜の遊女 四国宇和島

出身）

トシちゃん（金水桜の遊女 四国観音
 寺出身）

花子さん（貸席 金波館の遊女 朝鮮
 馬山出身）

無名の遊女（貸席 金波館の遊女）
 海軍士官（特攻隊兵士の引率者）
 海軍特攻隊員

岩崎上等飛行兵曹（高知出身十八歳）

鈴木二等飛行兵曹（静岡出身十七歳）

清本一等飛行兵曹（京城出身十八歳）

神河（旅館「神力」の主人）以下略

